

新世紀『真田サミット』開催報告書



サミット第1部 基調講演

演 題：「白石と真田家のゆかり」

講 師：成城大学 学長 我 妻 建 治 氏



只今ご紹介を頂きました我妻建治でございます。私は白石生まれの人間でございます。また、真田家ゆかりの人間でもございます。

本日の演題として、「白石と真田家のゆかり」というテーマを与えております。先程来、このテーマについてはいろいろお話がありましたので、前置きは略しまして、いきなり、白石の片倉家と真田家という、そこからお話を始めていきたいと思えます。

元和元年5月の大坂夏の陣の後に片倉家に引き取られてきた阿梅様おうめ、これは泰陽院たいよういんという院号でございます。泰陽院様は白石に来て二代目の小十郎重綱（後、重長）、法名いっぽうは一法様でございますが、一法様の庇護を受けた。やがて寛永の初めに一法様のご後室になられ、天和元年、78歳という大変長生きをされた方でございます。その後の三代、四代の片倉家の当主のバックになって非常に泰陽院様は活躍されたのでございます。

この泰陽院様おしょうぶが白石に移られた後に、先程お話にありました妹さんの阿菖蒲様であるとか、あるいは大八という弟さんとか、そういう人たちが白石を訪れて片倉家の庇護のもとに入っていくのです。阿菖蒲様のことは、片倉邦雄様おきたが先程おっしゃられましたように、この阿菖蒲様と田村定広えんどういんとの結び合わせてによって於喜多様、圓同院という院号でございますが、圓同院様の名跡を継ぐということで今の片倉邦雄様がおられるわけでございます。それから、大八という、ちょっと女性にだけ様をつけて男には様をつけないのは、いささか様が悪いわけですが、この方が後に仙台藩士になりまして、幕末・維新のときには非常に伊達家側として働いた方の先祖になるのでございます。

どうして一法様おしょうぶが泰陽院様を庇護するようになったかということについては大体三つの説がございます。大坂落城の前日、5月6日の晩に真田方から保護してくれるようにとの矢文を送られてそれを一法様おしょうぶが受けたというような話とか、あるいは一種の略奪婚であろうとか、たまたま一法様おしょうぶの陣屋の前に輿があった、しかし、中の女性の名前はわからなかったというような、いずれもそれなりにリアリティーリアリティーに富んだお話がございますけれども、いずれが真実かということになりますと、私は歴史学をかじった者としては、はっきりと

断言することは出来ません。この際は、まあ、一番おもしろいのがよかろうと。恐らくこれから講談があるようでございますが、講談では一番おもしろい話が出てくるだろうと思いますが、その三つのうちの一つが出てくるはずでございます。少なくとも寛永の初めには一法様の後室になられるわけでありませう。

さて、一法様は、その先妻の方との間に、於喜佐様おきさという娘さんがおられました。凌りょう霄院様しょういんですが、この方は、松前市正安広まつまえいちまさやすひろのところへ嫁入りしまして生まれたのが、三代目小十郎であります。この方は一法様の外孫に当たるわけですけれども、一法様はこの方を幼少より引き取って、養子としました、景長、つまり逸山様いつざんと言われる方でございます。ですから逸山様という三代目の小十郎を、手塩にかけて泰陽院様は育てた。つまり養母として終生この人を守り育てたということになります。逸山様は、長じて、寛文事件という仙台藩未曾有の難局にのぞみ、仙台藩の護持・存続のために大いにつとめられた方です。泰陽院様は、逸山様逝去の後、半年の後に亡くなられましたので、逸山様を、文字どおり揺りかごから墓場までみとったことになります。

この逸山様の娘さんに於松様おまつという方がおられますが、この方は貞樹院様ていじゆいんという方でございます。この方は二代藩主伊達忠宗公の子供の宗房という人に嫁いで生まれたのが仙台藩五代目藩主で、後年、仙台藩中興の祖と言われます吉村公でございます。ですから、吉村公の背景には、それとなく泰陽院様の力があつたろうと考えていいだろうと思います。一法様が亡くなられ、逸山様逝去後まで長生きしました泰陽院様は、ある意味では政宗公や初代の傑山様けっさん（景綱）を育てた於喜多様（圓同院）と比べて、同じくらいの力を片倉家のために、また、間接的には伊達家のために阿梅様は尽力されたということでございます。

そこで、1人の男子と3人の女子、あるいは4人の女子という考え方もできるかもしれませんが、幸村の子供たちは白石に保護されますけれども、当時、これは、かなり公然の秘密でございました。こういう人たちが仙台藩内にやっていると、続々と大坂の牢人、つまり真田の遺臣を含んだ大坂牢人が仙台藩に入ってきます。そして、特に白石にはたくさん入ってまいります。そのような人びとを、片倉家のご家中の中で何人もそれを数えることができます。例えば、三井覚左衛門みついかくざえもんという人がおりますけれども、これは真田家の姻族の一人でございますが、白石に来て5貫文の禄をもらいます。白石で5貫文というのは非常に最上層のご家中で、全ご家中の一割にもならないくらいでございます。そういう中で、この三井覚左衛門は5貫文とりのご家中として一法様のときに雇われて、そして終生泰陽院様に仕える。その子孫は幕末まで続くことになります。ちなみにこの覚左衛門の第二子善休は、白石に現存する清林寺の開山となっております。また、水野治郎左衛門みずのじろうざえもんというような人は、これは3貫400文ぐらいでございます。3貫文以上の家というのも非常に上層のご家中でございます。これも大坂方の牢人でございます。現在も白石にはその子孫がおられます。それから、桑名半兵衛くわなはんべいというような人もおります。これも泰陽院様との

縁でご家中に雇われた人でございます。これは1貫500文くらいのいわば中級の家中に登用されてきているわけです。

このように、一法様や逸山様の御代に採用され仕えた、非常にたくさんの大坂方の牢人あるいは真田の遺臣たちがこの白石に入ってきているわけでございます。当然それらの人びとは家族を持ち、私のように足軽小者のような者まで入れますと、非常に多くの大坂牢人あるいは真田の遺臣というものがあることとなります。場合によっては、つまり、白石という地域の習俗であるとか、あるいは生活文化というようなものを考える場合には、この積み重なった中へそういうたくさんの人々が、少なくとも一法様あるいは逸山様、17世紀の初めから中ごろまでに白石へ流入した人たちの持ち込んだ風俗・習慣あるいは生活文化というようなものがどれだけ今日に残っているか、その文化相を見つけ出す、これは大変興味のあることだろうというふうに思いますし、しかし、その発掘は非常に難しい作業になるかと思いますが。片倉邦雄様の奥様は元子様とおっしゃいます。私は、邦雄様より奥様の方を随分昔からお名前を存じ上げている、文化人類学者といたしますか、エスノロジストでございます。いわゆる比較文化、比較民俗学といたしますか、国を越えてフィールドワークもよくやられる著名な奥様でございます。この方が、白石に半年くらい、川井家にでもお泊まりになって、じっくりとその比較的な方法、あるいは手続、いわばエスノロジストとしての方法や手続を駆使しますと、ある意味ではそういう白石地方の文化の位相が見えてくるかもしれません。今となっては遅いかどうか、柳田民俗学ではちょっとだめかなとか。私どもの成城大学は柳田民俗学のいわば日本の中心的な研究センターの一つでございますが、いささか柳田民俗学ではちょっと白石の文化の諸相を取り出すのは難しいかもしれません。エスノロジーの方からなら取り出せるかもしれません。これは元様にでも市長はお願いして、白石市の教育委員会で大いに頑張ってもらいたいというふうに思います。

私の持ち時間は30分なのでございますが、まだ少々時間がございますので、もう一つ今度は片倉家との関係とは別に、白石と真田家の話をしてみたいと思います。

皆さん、この「新世紀真田サミット」というパンフレットをお持ちだろうと思います。6ページを開いていただきたい。ここに「真田一族系譜」というのがございます。この中に、昌幸の子供に信之があり、信繁というのがある。信繁はつまり幸村のことでございます。阿梅様の妹に「あぐり」という女性がおります。あぐりは三春城主蒲生源左衛門郷喜室というふうに書いてございます。これは大変白石に関係があるといえれば関係が非常にありと考えられます。

天正19年でございますが、蒲生氏郷がもうじさとはこの白石も含めて、少なくとも伊達政宗が会津黒川領を豊臣秀吉に没収される、秀吉のいわゆる奥州仕置のとき、91万石という大名になって会津に入ってまいります。「黒川」という地名を「若松」というふうに変えたのが

蒲生氏郷でございます。「白石」を「益岡」と地名を変えたのも蒲生でございます。この蒲生氏郷の家来に蒲生源左衛門郷成がもうげんざえもんさとなりというのが4万石を与えられて白石城主になったと。これは、今、お城に上がりますと観光案内板がありますが、その中にそう書いてございます。つまり、白石城主白石家から二代後くらいに蒲生源左衛門郷成というのが白石城主となります。このときに、今日のような白石城の縄張りや白石の町割りが行われたと考えられます。この郷成の末が恐らく郷喜でございます。そして、そこへあぐり様が嫁入りをしたということになります。

あぐり様の養父になるのは、織田信長の軍団長でございました滝川一益たきがわかずますの孫である一積いちあつという人でございます。この養女にあぐり様はなっております、養女の資格でこの蒲生源左衛門家に嫁入りしたということになります。それでは、滝川の養女になぜなったかといひますと、一積の細君は昌幸の娘で、幸村の妹であります。それでは、蒲生と真田はどのような関係にあるかといひますと、あるいは直接関係があるかといひますと、これは氏郷の時代にさかのぼりますと、ある程度想像がつくのでございます。

蒲生氏郷は、織田信長の最末年は近江の日野で6万石でございました。そして、その後、本能寺の変の後に秀吉によって伊勢松坂で12万石、それから二、三年たって16万石になります。天正18年になって会津に秀吉によって移封されて42万石になり、翌年91万石になります。つまり天正12年ころから七、八年のうちに6万石から91万石になるのです。ですから、禄高に応じて膨大な家臣団を蒲生氏郷は持たなければならぬことになります。したがって、いろいろな牢人者を抱えてくることになります。

まず、蒲生源左衛門は柴田勝家の家来でございました。柴田勝家の没落の後に蒲生氏郷に仕えます。もとは坂源次郎さかげんじろうという名の侍でございますが、それが、蒲生の姓と郷の字をもらいまして、蒲生源左衛門郷成となります。氏郷の家来のうちではかなりトップの方のクラスになります。それから、滝川一益の家来も入っております。これは谷崎忠左衛門たにざきちゅうざえもんというのでございます。滝川一益に仕えていたのですが、一益の没落後、蒲生家の家来になって蒲生忠左衛門になります。これは2万5,000石でございます。会津には、それではこのほかどういう人がいたかということ、幸村のおじ様に真田隠岐守信尹さなだおきのかみのぶただという人がございます。この人は後に徳川家の旗本になりますが、このころ蒲生に6,000石で仕えているのです。つまり会津若松にいたのです。また、真田家の家臣で、昌幸に仕えた人で、曾根内匠助そねたくみのすけという、これも6,000石で蒲生氏郷に仕えておるのです。

このように見ますと、蒲生家とそれから真田家というか、あるいは滝川家というそういう関係が複雑に絡み合った人脈がありますから、滝川一積の養女が蒲生源左衛門家の嫁さんにやる、あるいはもらうなどというのはそれを後援する周辺の人々がいっぱいいた、いわば縁があったということになります。このあぐり様はこの蒲生源左衛門郷喜の室なるのはある意味では決して不自然ではない。しかも、郷喜というのはこれは蒲生源左衛門とい

う、源左衛門はこの家の通称でございますから代々源左衛門を使うわけです。この源左衛門というのは郷成のときの白石城主であったと。つまり、片倉家の白石入部のかなり前の領主がこの蒲生源左衛門郷成であった。そういう意味では、このあぐり様も白石に「ゆかり」のある家の奥方に結果的にはなっていたというようなことになろうかと思えます。

この真田家の人びとを一つ一つ拾っていきますと、きょうは真田家「ゆかり」の13市町村の首長の皆さんが集まっておられますが、もっと広く、思いがけないところに思いがけない「ゆかり」の人がいろいろいるかと思えます。それから、片倉家は天下三陪臣の一人と言われるくらいでございますから、片倉家のいわばネーションワイドに名をはせた家でございますから、もっと広い深い範囲内で「ゆかり」を持つような人たちというものがあろうかと思えます。

申し上げれば、きりがいい話になるわけですがけれども、片倉家と真田家、蒲生を挟んで白石と真田家というようなことを、もちろんご存じの方もおられるかと思えますけれども、一つの知識として、ここに皆さんに申し上げて私の講演を終わりにさせていただきたいと思えます。ご静聴ありがとうございました。(拍手)